

児童生徒を支援する力を高める校内研修に関する研究

—教育相談的な手法と「教員のメンタルヘルスに関するアンケート調査結果」を生かして—

教育相談チーム

I 研究の趣旨

本研究の目的は、児童生徒を支援する力を高める校内研修に関して、校内研修実践資料の考案と実施を通して、教員の児童生徒を支援する力を組織的・計画的に向上させることにある。

平成22年度に教育相談チームが基本研修等受講者706名に対し実施した「教員のメンタルヘルスに関するアンケート」の調査結果によると、研修者の約70%が何らかの仕事上のストレスを抱えており、特に、ストレスの程度が高い研修者ほど、児童生徒・保護者・管理職・同僚との関係（以下、人間関係）についてストレスを感じていることが分かった。このことから、児童生徒を支援する力の基盤の一つとして、個々の教員が人間関係を円滑に結ぶスキル等を身に付ける必要性が指摘でき、そのためには教員自身が人とかかわるスキルを学ぶ機会を持つことが重要であると考えられる。

また、同調査の結果によると、ストレスを感じながらも、対象者の約90%が教員の仕事に対して充実感ややりがいを感じており、特に、他の教員からの承認や支え合える同僚の存在が充実感ややりがいにつながっていることが分かった。このことから、教員集団が組織として機能することの重要性が指摘でき、教員相互の同僚性や協働性が醸成されることによって、児童生徒を支援する力が組織として高まると考えられる。

そこで本研究では、教員が児童生徒を支援する力を高めるために、教員個々の力量向上と教員集団の組織力向上が図られるような校内研修実践資料を作成していく。

II 研究の概要

1 主題についての考え方

(1) 「児童生徒を支援する力」について

本研究では、以下の二つを「児童生徒を支援する

力」と押さえた。

〈個人として身に付けたい力〉

- ・ 児童生徒を理解し、問題へ対応する力と人間関係を築く力

〈組織として身に付けたい力、状態〉

- ・ 互いに認め合い協力し合う力（職場）

(2) なぜ校内研修なのか

児童生徒を支援する力を高めることは、教員一人一人に恒常的に課せられた責務であると同時に、教員集団が組織的に取り組むべきものである。この児童生徒を支援する力を高めることへのアプローチとして校内研修に着目したのは、校内研修がその機能として教員個々の力量向上と教員集団の組織力向上を併せ持つためである。

2 研究内容・方法

(1) 教員が児童生徒を支援する力を高めるための個々の力量向上と教員集団の組織力向上が図られる実践についての理論研究及び実施案の考案

- ① 児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力（スキル・状態）を「教員のメンタルヘルスに関するアンケート調査結果」を生かして選定する。
- ② ①で選定した力を効果的に高めていけるような校内研修実施案を、教育相談的な手法を生かして考案する。

(2) 研究協力校（小学校）等における実践と検証

- ① 研究協力校*¹及び校内研修の実施依頼校*²において実施案をもとに校内研修を実施する。
- ② 校内研修を実践した後に、教員の変容をとらえる。
- ③ ②をもとに、校内研修実施案に修正等を施し、『校内研修実践資料小学校版（試案）』を作成する。

*¹ 研究協力校…本教育センター（以下、教育センター）か

ら研究協力を依頼した学校

※2 校内研修の実施依頼校…学校からの講師派遣依頼を受け、
教育センターより出向いて校内研修を行った学校

Ⅲ 研究の実際

1 児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力の選定

児童生徒を支援する力につながる教員の力を考えるため、平成22年度の「教員のメンタルヘルスに関するアンケート調査結果」を分析したところ、以下の点の必要性を指摘することができた。

- ・ ストレスを感じる程度が高い研修者ほど、人間関係に関するストレス項目を選択する割合が増えており、人間関係を結ぶ力が求められている。

ストレスの程度と対人ストレスの関係

ストレスの程度	人間関係に関する設問のストレスの程度(4項目平均:最高4.0,最低1.0)		
	小学校	中学校	高等学校
4:とても感じる	3.0	2.8	2.7
3:少し感じる	2.5	2.4	2.3
2:あまり感じない	2.0	2.0	2.0
1:ほとんど感じない	2.0	1.8	1.8

(対象:平成22年度教育センター基本研修等受講者706名)

- ・ ストレス要因として、「教材研究の時間がない」「持ち帰り仕事」「生徒指導」「学習指導」「保護者対応」等があり、生徒指導面では児童生徒の問題への対処、保護者への対応が重要となっている。
- ・ 相談するのが苦手、相談を受けるのが苦手な人は、ストレスを強く感じ、やりがいも低くなっており、援助を受ける力が必要となっている。
- ・ やりがいにつながることは、①「授業がうまくいくこと」、②「児童生徒への対応」、③「学級のまとまり」、④「和やかな職場の雰囲気」、⑤「児童生徒からの信頼」の順であり、生徒指導面では児童生徒・学級集団の理解と対応、同僚性・協働性が大切になっている。
- ・ ストレスが高い人ほど、「自分のよさの承認」がやりがい感につながっている。
アンケート結果からは、教員がストレスへ対処し

かれていない状態がとらえられた。しかし、これを教員個人の問題としてのみ考えるのではなく、多くの教員が社会や子どもの変化に苦慮していると考え、この状況に積極的に対応していくことは個人の問題を超えて、現代の教員・学校に課せられた時代や社会の要請ととらえた。また、上記①～⑤のやりがいにつながる項目は、学校生活を充実させていくための指針として、より主体的に対応すべきものと考え、「児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力」として、次の力を選定した。

〈個人として身に付けたい力〉

- 児童生徒を個人・集団として理解する力 …………… A 1
 - コミュニケーション力（相談面接のスキルと自己表現のスキル） …………… A 2
 - 児童生徒間の人間関係づくりを促進する力 …………… A 3
 - 指導困難事例への対応力…………… A 4
- 〈組織として身に付けたい力、状態〉
- 同僚と助け合い協力して活動する力、職場 …………… B 1
 - 同僚間で承認感を高め合う職場…………… B 2

2 校内研修実践資料の考案

(1) 教育相談的な手法を生かす

文部科学省が発表している病気休職者数等の推移のデータでは、精神疾患による休職者数が増加し続けているとあり、40代、50代の教員が全体の約65%を占めている。教員意識調査からも、「これまでの知識や経験では対応できないことが多すぎる」の項目で高い値を示しており、アンケートからのとらえと同様の傾向を示している。

このような中で、教育相談の手法は、理論と実践、技法が一体となっており、様々な問題に対応可能なものである。また、実際場面で使える理論を持っていると先が見通せて具体的に動きやすくなると同時に、応用が利くようになると考えられる。そこで本研究では、次の教育相談的な手法を用いて、「児童生徒を支援する力」の育成に取り組んだ。

- 児童生徒を個人・集団として理解する力に関するもの
児童心理と発達課題, Q-U*1
- コミュニケーション力(相談面接のスキルと自己表現のスキル)に関するもの
相談面接(児童生徒・保護者), アサーショントレーニング*2
- 人間関係づくりを促進する力に関するもの
SGE*3, PA*4, SST*5, Q-U, ストレスマネジメント
- 指導困難事例への対応力に関するもの
インシデント・プロセス事例研究*6, Q-U事例研究
- 同僚と助け合い協力して活動する力, 職場に関するもの
SGE, PA, SST, インシデント・プロセス事例研究, Q-U事例研究
- 同僚間で承認感を高め合う職場に関するもの
コーチング*7, SGE

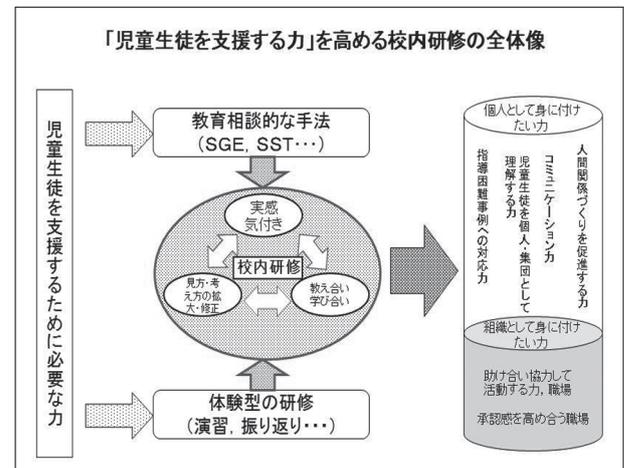
- *1 Q-Uとは、楽しい学校生活を送るためのアンケートのことであり、標準化された心理テストである。児童生徒の意欲や満足感、学級集団の状態などを測定でき、教員は一人一人を理解して個別対応につなげたり、学級集団の状態を理解して今後の経営を工夫したりすることができる手法である。
- *2 アサーショントレーニングとは、自分も相手も大切にしながら、自分の意見や気持ちを表現できるようにするトレーニングである。自分の気持ちや考えを率直に表現するスキルを身に付け、よりよい人間関係をはぐくむことができる手法である。
- *3 SGEとは、構成的グループエンカウンターのことであり、ゲーム的要素を持った課題と取組みの振り返りを含んだグループ体験活動である。取組みの中で仲間との心のふれあいを体験し、自他理解を深めたり承認感を高めたりことができ、児童生徒と教員が共に成長できる手法である。
- *4 PAとは、プロジェクト・アドベンチャーのことであり、グループで冒険的課題に挑み、その取組みを振り返るように構成された体験学習プログラムである。相互の信頼関係を築きながら自己理解を深めたり社会性を高めたりする効果があり、児童生徒と教員が共に成長できる手法である。
- *5 SSTとは、ソーシャル・スキル・トレーニングのことであり、よりよい人間関係を築き、維持していくための社会的

技能をトレーニングにより育てる方法である。他人や自分の思考・感情に対する理解や共感を踏まえたスキル獲得をめざしており、他者理解を深め人間関係づくりを円滑にすることができる手法である。

- *6 インシデント・プロセス事例研究とは、簡略な事例(インシデント)に対して、参加者が質問することによって事例の概要を明らかにしながら対応策等を考えていく事例研究方法である。問題発見能力や情報分析能力を培うことのできる手法である。
- *7 コーチングとは、傾聴や承認、質問によって、相手の自発的な行動を促進させるコミュニケーションサポート技術である。その人が本来持っている意欲や能力、可能性を引き出し、意志決定や対人関係能力を促進させることができる手法である。

(2) 校内研修実施案の考えと基本構成

校内研修実施案は、体験的な活動を通して、児童生徒を支援する力につながる教員に必要な力が高められるように考えた(以下、体験型の研修)。実施案の組立ては、「はじめに→説明・演習→まとめ」を基本とし、「はじめに」では、緊張感を緩和する活動や活動への動機付けを行う。「説明・演習」では、まず、活用する教育相談の手法を説明し、次に、目的に応じた演習を行い理解を深めていく。「まとめ」では、演習の振り返りを通して自分の認知や行動を修正、拡大していく。その際、学校における授業を中心とした多様な場面で生かせる活動を体験し、実際に活用できるようにしていく。また、教員が共に活動する中でコミュニケーションが密になり、感情交流が図られ、他の教員への理解が深まったり互いに承認し合ったりできるように考えた。



3 校内研修実施案に基づく実践と考察

研究を進めるにあたっては、研究協力校の実態とニーズを把握し、それに応じた校内研修を行った。研究協力校との打合わせでは、児童の問題や保護者の要望の多様化と学校の対応力強化の必要性が確認できた。併せて、学校からは特定の問題への対処だけではなく、すべての児童への対応力を更に高めていきたいとの要望があった。これらを受けて、下図の校内研修案を提示し検討を行い、9月に第1回、10月に第2回、2月に第3回の校内研修を実施した。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
行事等	入学式 始業式	運動会 遠足	修学旅行 プール開き	授業参観 探究学習 探究学習	授業参観 探究学習 探究学習	夏休体験 始業式 水泳記録会 運動会	ボランティア 活動 市商大会 旅行	カリヨン祭 就学時参観	マラソン大会 小中音楽祭	始業式 運動会 授業参観	スキー教室 小中連携授業	授業参観 修業式
生徒指導		教育相談						教育相談				
保護者との関係	来校説明			学年末懇談会			P.T.A.教養講座		個人懇談会			学年末懇談会
児童・生徒と教師の人間関係	関係づくりのスキル（友達づくり） 関係維持のスキル（友達関係の深化） 関係づくりのスキル（友達関係の拡大） 関係改善・問題解決のスキル											
児童への対応力を高める校内研修	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>児童・生徒の自己理解に関する研修→E, PA等</p> <p>児童の自己理解に関する研修→E, PA等</p> <p>児童の自己理解に関する研修→E, PA等</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>子どもの社会性を促進する一関係づくりのSST等</p> <p>子どもの社会性を促進する一関係づくりのSST等</p> <p>子どもの社会性を促進する一関係づくりのSST等</p> </div> <div style="width: 30%;"> <p>保護者との信頼関係づくりに関する研修→SG, E, コーチング, S, PA等</p> <p>保護者との信頼関係づくりに関する研修→SG, E, コーチング, S, PA等</p> <p>保護者との信頼関係づくりに関する研修→SG, E, コーチング, S, PA等</p> </div> </div> <p>インテグレーション研究 法による事例研究</p> <p>教員同士の相互理解に関する研修→E, PA等</p> <p>教員の自己理解に関する研修→E, PA等</p>											

また、校内研修実施依頼校での実践では、依頼校が研修一覧表※3の中より選択した内容で校内研修を行った。本稿では小学校3校での実践について紹介する。

※3 研修一覧表…教育相談チームが外部依頼に対応できる講座名や内容等を記載した表。「児童生徒の人間関係づくり」講座など10種類の講座がある。

(1) 実践1 研究協力校における第1回校内研修 - 身に付けたい力 A2 (※P.18参照, 以下同じ)

① 活動名 「保護者との相談面接」

② ねらい

- 保護者と対立関係に陥らずに協力関係を結ぶ相談面接を行うポイントを理解することができる。
- 実際場面を設定して、単独及び複数の教員で対応する相談面接の力量を向上することができる。

③ 指導のポイント

- ・ 保護者の気持ちを理解・支持し、協力関係の中で児童の問題解決を図るようにする。
- ・ 演習の善し悪しではなく、演習を通じた気付きから多くのことを学ぶことができるようにする。

④ 実践の概要

研究協力校 校内研修「保護者との相談面接」実施案

実施過程	実施内容・要点	時間	*留意点
0 はじめに	◎本講義演習の概略説明 ◎講義者の自己紹介、ウォーミングアップ ◎本時の意義の確認 ◎ねらいの確認	14:30 [6]	*ミニ・エクササイズを通して自由に意見を言合える雰囲気をつくる
1 説明 A「相談面接の基礎・基本」	◎「相談面接の基礎・基本」の講義 (1)何のために相談面接を行うのか ◎問題を解決するための相談面接であること (2)相談面接の基本 ◎相談面接を進めるための基本事項を理解する ・心構え ・面接場面の設定 ◎相談者に面接者の気持ちや意見を押しつけない (3)留意点 ◎基本的な技法を確認する ・姿勢 ・繰り返し ・支持 (4)相談面接の基本的な技法	14:35 [10]	*はじめに相談面接の目的を共通確認する *面接者の姿勢と位置関係については体験を通して理解する *教師が陥りがちな相談面接の危険性について理解する *技法は適切に使えば効果的であるが「はじめに技法ありき」ではないことに留意する
B「保護者との相談面接」	◎「保護者との相談面接」の講義 (1)何のために保護者面接を行うのか ◎保護者と教師が協力関係をつくり、児童生徒の問題解決を支援するための相談面接であることを理解する (2)相談面接の進め方と留意点 ◎相談面接の進め方と留意点を理解する ・連絡時 ・相談面接前 ・相談面接時 ・面接終了後 ◎保護者の基本的なタイプを確認する (3)保護者のタイプ	14:45 [15]	*一般的な流れや分類であり、必ずしも当てはまらない場合もあることに留意する
2 演習	◎「保護者との実際場面」についての演習 (1)電話での相談「登校しぶりの児童の母親と」 ◎事例の概要把握 ◎保護者、担任、観察者の役決め、ロールプレイを行う [3分] ◎グループでの振り返りをする [1分] ◎全体での振り返りをする [5分]、各班の意見全員で共有する ◎2度目のロールプレイを行う (2)来校した保護者との面談「いじめ被害を訴える父親と」 ◎事例の概要把握 ◎保護者、担任、学年主任の役決め、ロールプレイを行う [3分] ◎グループでの振り返りをする [1分] ◎全体での振り返りをしてし [5分]、各班の意見全員で共有する ◎2度目のロールプレイを行う ◎対応策や留意点について話をする	15:00 [5]	*事例1は初期対応を取扱う *3人1組のグループで行う *グループ、全体での振り返りを大切にしなが望ましい対応について考える *保護者面談には特効薬はないことを再確認する *事例2は緊急対応の事例を取扱う *3人1組のグループで行う *グループ、全体での振り返りを大切にしなが望ましい対応について全員で考える *日常の地道な信頼関係づくりが最も大切であることを再確認する
3 まとめ	◎研修者に感想を述べてもらい、振り返りを行う	15:55 [6] 16:00	

◇ はじめに

導入として、進行者に対して意識的に「負ける」後出しじゃんけんを行った。思わず勝ってしまうという結果から、人はだれでも相手に「勝とう」という意識を持っていることを確認し、本研修では各教員が持つ「相談＝指導助言」という意識の変革が必要であることを示唆した。その後、本研修のねらいを説明した。

◇ 説明・演習

まず、進行者は相談面接の目的、心構え、面接場面の設定、面接者の姿勢と位置関係について説明した。参加した先生方は相談者を説得するのではなく、相手を理解し受容する心のゆとりを持ちながら話を聴くこと、相談者との信頼関係を築くことの大切さを確認した。続いて、保護者との相談面接の進め方や留意点について、連絡時・面接前・面接時・面接後の段階に応じて説明をし、保護者との相談面接では児童の将来を考え、問題行動の否定的な側面の指摘にのみ偏らず、望ましい態度や活動等の肯定的なメッセージについて



電話相談演習の様子

も伝えることの意義を確認した。

次に、これまでの説明の内容と関連させながら、「登校しぶりの児童の母親」からの電話相談場面の演習を行った。先生方は班ごとに児童や母親の心情、クラスや登校しぶりの背景を想定し、①ロールプレイ、②グループ内での振り返り、③全体の意見の共有を一巡とし、教師、保護者、観察者のすべての役割に取り組んだ。先生方は演習を通して、自身の電話相談の仕方の癖に気付く様子が見られ、振り返りでは「よい電話相談かどうかは、保護者が満足できたかにあり、教師側が判断することではないことが分かった」という意見が出された。

演習の後半では、「いじめ被害を訴える父親」が来校相談した場面の演習を行った。学級担任役と学年主任役のペア対応で、電話相談時と同様、先生方は保護者、学級担任、学年主任のすべての役割に取り組んだ。先生方は



来校相談演習の様子

チームで対応することで安心感を持ちながら相談する様子が見られ、実際に保護者対応で悩みを抱えている先生方からは「学年主任の協力を受けたので、落ち着いて保護者の言い分を受けとめることができた」という意見が出された。また、父親役からは「学年主任が同席していたので、学校ではいじめを許さないとする姿勢を感じる事ができた」「経験を重ねた学年主任がいたからこそ、安心感が得られ、保護者としての思いを話すことができた」という意見が出された。

◇ まとめ

先生方は、本研修の感想や気付きを自由に振り返った。日頃から保護者の話をよく聴き、保護者との協力関係をつくること、状況に応じ保護者との相談面接は複数の教員で対応し、関係が切れないようにすることが大切であること等の意見交換を行った。

最後に、これまでの自己の相談面接を振り返り、対応の仕方について反省や修正を行った。

⑤ 実践の考察と改善点

〈考察〉

「保護者との相談面接を実施し、理解は深まった

か」を「深まった」から「深まらなかった」までの4件法で尋ねたところ、「少し深まった」も含めて全教員が理解を深めていた（図1）。

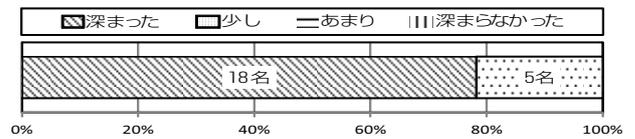


図1 研修内容の理解

理由としては、「保護者が心を開きやすい教員の対応の仕方に気付いた」「学校の指導に対する不安や焦りの中で、保護者は何かを話したい、話を聴いて欲しいという気持ちを持っていることに気付いた」等の感想があり、教員が保護者の立場を演じることによって保護者の気持ちを理解し、保護者の担任への思いや願いに気付くようになったことが分かった。一方、「具体的な対応の仕方を提示して欲しい」等の感想もあり、現実問題への対応を求めている教員の切迫した状況もうかがえた。

「協働性は高まったか」についても「高まった」から「高まらなかった」までの4件法で尋ねたところ、「少し高まった」も含めて全教員が高まりを感じていた（図2）。

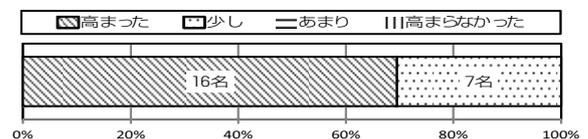


図2 協働性の高まり

理由としては、「担任が保護者対応をする上で、他の先生方の協力は大きいと感じる。組織の力を大いに利用したい」「みんな真剣に役割を演じており、最後の演習は学年主任と同席して面談することで解決策が見えてきた。学年全員で協力して児童を見ていくことが大切だと思う」等の意見があった。教員が演習から支え合う関係の深まりを実感し、複数対応の相談面接の有効性を実感する機会となったことが分かった。

〈改善点〉

- ・ 演習の内容を充実させるため、説明資料を事前に配付することで演習の実施時間の確保を図る。
- ・ 同僚性・協働性の更なる向上のために、若手教員、中堅教員、ベテラン教員が配置されるようなバランスのよいグループづくりを行う。

- ・ 保護者対応の多様さから複数の事例を準備し、学校の実態に応じて事例を選択して演習を行えるようにする。

(2) 実践2 研究協力校における第2回校内研修

－身に付けたい力 A4 B1

① 活動名 「事例研究」

② ねらい

- 事例に関し、情報収集をすることにより児童理解を深め、具体的な指導援助策を考えることができる。
- インシデント・プロセス事例研究法について、演習を通して体験的に理解することができる。

③ 指導のポイント

- ・ 情報収集を重視し、参加全教員で全体像をつくり上げていくようにする。
- ・ これからどうかかわるか、具体的な指導援助策を考えていくようにする。

④ 実践の概要

研究協力校 校内研修 「インシデント・プロセス事例研究」実施案

実施過程	実施内容・要点	時間	*留意点
0 はじめに	◎本講義演習の概略説明 ○講義者の自己紹介、ウォーミングアップ ○事例研究の意義の確認 ・児童のために ・教師自身のために ・教師集団のために ○ねらいの確認	14:30 [10]	*事前に事例提供者と質問の受け方等を確認しておく *事前に学年を中心とした4人程度のグループをつくっておく
1 説明 インシデント・プロセス事例研究法とは (1)特徴 (2)事例提供 (3)進め方	◎インシデント・プロセス研究法の特徴・事例提示・進め方の説明 ○情報収集し、児童理解を深めながら、具体的な指導援助策を考える ○事例の記載内容と指導経過を記載しない ○概要・時間配分・記録用紙等	14:40 [10]	*提供者の見方・視点からの情報だけでなく参加者全員の質問で事例の全体像をつくる意味を理解してもらう *指導経過を記載しない理由として、ここでの事例の全体像から自由に指導援助策を考える意味を確認する
2 演習 (1) 事例の提示と情報収集	◎インシデント・プロセス事例研究法での演習 ○事例の概要把握 ○問題理解に必要な質問の検討並びに記録用紙1への記入 ○一問一答形式での、事例提供者への質問(他の参加者の質問は共通の情報にする)	14:50 [10]	*はじめに事例提供者を紹介する *ここで班のまとめ決定しておく
(2) 個人研究	○事例の問題点3項目を1項目ずつ付箋紙に記入する。併せて、それに対応する援助の方向・対策を1項目ずつ付箋紙に記入する ○指導の対象別に、付箋紙に記入した問題点と具体策を記録用紙2に貼り付ける	15:10 [10]	*事例提供者の立場で、問題点や具体策を考えることを確認する
(3) グループ研究	○一人一人、記録用紙3に付箋紙を貼り付けながら、問題点と具体策を発表する ○重要な発表にマーカーで目印等をし、グループとしての3項目の問題点と具体策を検討する	15:20 [20]	*全員にもれなく発言してもらう *3項目の中から「担任が取り組みやすいと思われるもの、効果があると思われるもの」は何か検討する
(4) 全体研究	○各グループの問題点と具体策の発表・協議 ○事例提供者からの指導経過等の説明により全体研究をする ○対応策や留意点について話をする	15:40 [15]	*全体で一つの案にまとめない *本日の事例の秘密保持の確認
3 まとめ	◎事例提供者に感想を述べてもらい、振り返りを行う	15:55 [5] 16:00	*事例の回収

◇ はじめに

まず、緊張をやわらげる活動として、がんばりを認め合うショートエクササイズを行った。学年を中

心にした4人のグループの中で、各人ががんばっていることを1分間で発表し合った。エクササイズが始まると、話を聞いていた最初の静かな雰囲気から、笑い声が聞こえたり笑顔でうなずきながら話を聞いたりする和やかな雰囲気となるなど、リラックスして活動している様子が見られた。

◇ 説明・演習

次に、進行者がショートエクササイズの内容と関連させながら事例研究への意欲付けを行い、ねらいを提示してインシデント・プロセス事例研究法の特徴、進め方の説明を行った。その際、参加者全員の質問から全体像を浮かび上がらせること、これからどうかかわるかの具体的な指導援助策を考えることなどのこの事例研究法のポイントを強調した。

説明後は、実際の事例に基づいて、インシデント・プロセス事例研究法での事例研究を行った。最初に、事例提供者の先生が事例を読み上げ、そこから参加者の先生方が問題の理解に必要な質問を考えていった。先生方は事例を読み返し、印やアンダーラインを付けながら考えていた。その後、「端的に質問すること」「どんな指導援助をしたかは問わないこと」などの質問の仕方と、「聞かれたことにだけ答えること」などの質問の受け方について説明した。先生方からは、不足する情報を補ったり解決をイメージしたりする質問が多く聞かれた。しかし、問題を解説してからその後に質問をしたり、自分の体験を述べて「この状況ではどういう対応をしたらよいか」と聞いたりする場面が見られた。また、大まかな質問で端的に答えきれない場面も見られるなど、時間が有効に使われたとは言えない状況があり、情報収集がより効率的に行われる一層の手立てが必要であった。

続いて、個人で何が問題なのかを考え、対応策を付箋紙に書き込んだ。短い時間であったが、それぞれの問題意識をもとに真剣に指導援助策を考える様子が見られた。

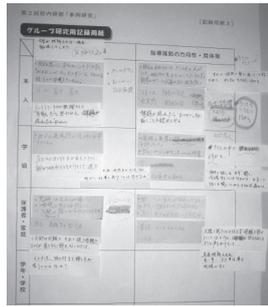
その後、学年を中心としたグループにおいて個人の指導援助策を発表し、グル



グループ研究の様子

ープとしての具体的な指導援助策の検討を行った。どのグループも学年主任を中心に活発に検討を行う様子が見られた。

最後に、全体研究を行った。各グループからの発表を行い、指導援助策をよりよいものとするように意見交換を行った。発表の時には、他のグループの発表に聞き入る様子が見られたが、**グループ研究後の付箋紙が貼られた記録用紙** 解決に向けた案も出た一方で具体的でない発表もあり、グループ研究方法の課題が見つかった。



グループ研究後の付箋紙が貼られた記録用紙

◇ まとめ

事例提供者がこれまでの指導の経過や検討後の感想などを述べた。感想では、アドバイスをこれからの指導に取り入れようと考えていることや新たな気付きを得たこと、初心に戻ってがんばりたいということ、が話された。

最後に、進行者が今後の指導援助への取組みや事例研究の活用について話をし、アンケートへの記入を通して振り返りを行った。

⑤ 実践の考察と改善点

〈考察〉

「インシデント・プロセス事例研究をやってみて理解は深まったか」を「深まった」から「深まらなかった」までで尋ねたところ、「まあまあ深まった」も含めて全教員が理解を深めていた（図3）。

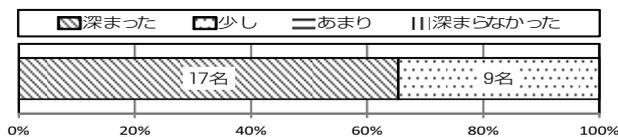


図3 研修内容の理解

理由には、「児童に関するたくさんの情報を収集することができた。児童を見る視点が広がり、様々な視点から指導援助の方法を考えることができた」「たくさんの意見を聞くことで、いろいろな見方があり、それに合わせて具体策があることが分かった」などの感想が多くあり、演習を通して、様々な視点から児童理解が行われ、理解をもとに指導援助策を考えたことが分かった。また、「実際にやることで、何をいつ、どのようにやっていくのかが理解できた」

「準備が簡単にできる。質問しながら理解を深めることができる。いろいろな意見を聞くことができる。これからの指導対策について考えていくことができる等、メリットがたくさんあって取り入れられる手法だと思った」など、インシデント・プロセス事例研究法について、演習を通して実感を持って理解を深めたことが分かった。しかし、「情報収集はできたが、担任外としてかかわる時に具体的にどう対応したらよいかまでは分からなかった」などの意見もあり、より現実的、具体的な指導援助策を考えるための手立ての必要性が感じられた。

「協働性は高まったか」についても「高まった」から「高まらなかった」までで尋ねたところ、「少し高まった」も含めて全教員が高まりを感じていた（図4）。

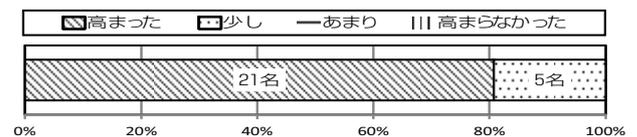


図4 協働性の高まり

理由では、「軽重があるにしても、それぞれの教員が同じ悩みを持っている。今回は同僚としての意識が高まった」「一人では解決しないようなことも、みんなの力を借りれば何とか解決することを改めて感じた。チームワークの大切さを実感した」など、同僚としての意識や協働する重要性を感じたことが分かった。

〈改善点〉

- ・ 一問一答による情報収集の仕方が伝わっていない場面があったので、質問の仕方、答え方を具体的につかめるようにモデリングを行う。
- ・ 対象児童の状況をとらえやすくして指導援助策を考えていくため、情報を黒板に整理していく。
- ・ 個人研究でのよい考えがグループ研究で取り上げられないことがあったので、個人研究では具体案とその理由を考えてグループで発表し、グループではそれをもとに、「いつ・どこで・だれが・何を」の具体案を検討するようにする。
- ・ 取組みの意図をとらえられていない参加者に対応したり、情報を黒板に記入したりするため、進行者の補助を付けて対応するようにする。

(3) 実践3 校内研修実施依頼校 A 小学校校内研修

－身に付けたい力 A3 B1

① 活動名

「学級の人間関係づくりに生かせる教育相談の理論と技法」

② ねらい

○ SST, アサーショントレーニング, SGEの理論と技法を理解することができる。

③ 指導のポイント

- ・ 教育相談の理論と技法を発達段階に即して簡潔に説明する。
- ・ 演習ではそれぞれの理論と技法の理解が進むように、具体的場面を設定して実施する。

④ 実践の概要

◇ はじめに

進行者が少子化・核家族化等の社会状況の変化により、学校でSST等を実施する必要性が高まっていることを説明した。

◇ 説明・演習

進行者が校内研修実施案をもとに「SST, アサーショントレーニング, SGEの理論と技法」について説明した。教育計画の中で無理なく展開するために、これまでの指導をSST, アサーショントレーニング, SGEの視点で見直すことが大切であると説明した。

その後、説明をもとに五つの演習を行った。

SST演習「どうぞ ありがとう」

プリントを後の席の人に渡す時、どのように渡せば相手が気持ちよく受け取れるかを参加した先生方に考えてもらいながら演習を行った。初めに悪い例を実践したところ「これは嫌な気持ちになるね」との声が聞かれた。

先生方は演習を通して配慮のスキルの大切さを実感していた。

アサーショントレーニング演習「三つの自己表現」

「攻撃的な自己表現」「非主張的な自己表現」「アサーティブな自己表現」を具体的な場面を設定して体験した。三つの自己表現のタイプを実際に先生方に演じてもらったところ「子どもたちにも分かりやすいね」といった声が聞かれた。

アサーショントレーニング演習「上手な頼み方」

小4男子が図画工作で使う空き箱を忘れ、友だちに何とかもらえるように頼む場面設定で行った。高学年児童にはこうした「葛藤する場面」を体験させることが有効であることを説明した。

アサーティブに頼む姿や「そう言われても僕も作りたいのあるんだよねえ」とアサーティブに断る姿が見られ、理解の深まりが感じられた。

SGE演習「サイコロトーク」

サイコロの目で「好きな食べ物」「行ってみたい外国」等の発表をした。楽しく他者理解と自己理解を進める中で、同僚に対する見方や考え方も広まった。また、「学級の子どもたちともやってみたい」という感想が出された。

PA演習「風船列車」

前の人の背中と後ろの人のおなかで風船をはさんで競走した。手を使うことができないので自然と協働する姿が見られた。



風船列車の様子

◇ まとめ

全体で振り返りの時間を持った。進行者からは学級経営に生かしていく際は実態に合わせて継続して実施することが大切であると伝えた。

⑤ 実践の考察と改善点

【研修内容の理解】



【協働性の高まり】



〈考察〉

事後のアンケート結果より、研修内容を十分に理解することができたことが分かる。「実際にやってみて身に付いた」といった感想からも内容を理解することができたことが読み取れた。

また、互いに学び合う中で教員の協働性を発揮する姿が見られた。

〈改善点〉

- ・ 「SSTについて詳しく知りたい」といった声が聞かれた。参考資料を加えると、生徒指導主事等が校内研修を進める際に役に立つ。

(4) 実践4 校内研修実施依頼校B小学校校内研修
-身に付けたい力 A2 A3

① 活動名

「Q-Uの結果を踏まえた教育相談の理論と技法」

② ねらい

○ SST, アサーショントレーニング, アンガーマネジメント*8の理論と技法を理解することができる。

*8 アンガーマネジメントとは、自分の中に生じた怒りの対処法を段階的に学ぶ方法である。

③ 指導のポイント

- ・ Q-Uから読み取れた課題を踏まえて、児童に身に付けさせたいスキルを選定する。
- ・ 演習では、それぞれの理論と技法の理解が進むように具体的場面を設定する。

④ 実践の概要

◇ はじめに

ウォーミングアップでは、隣の人と笑顔で自己紹介をする簡単なミニ・エクササイズを通して、自由に意見を言い合える雰囲気を醸成した。

◇ 説明・演習

進行者がSST, アサーショントレーニング, アンガーマネジメントの理論と技法を説明した。これらの理論が広く必要とされる背景にも触れ、具体例を挙げて理解の助けとなるようにした。

説明後に以下の演習を行った。

SST演習「あいさつバージョンアップ大作戦」

「おはよう」「さようなら」のあいさつをする時、「今日は〇〇をするのが楽しみです」「今日の給食おいしかったね」といった一言を加えると人間関係がより深まることを説明し、演習を行った。

「これならすぐに使えそう」等の声が聞かれ、参加された先生方の実践意欲も高まったようであった。

アサーショントレーニング演習「上手な断り方」



上手な断り方の演習の様子

小2女子が友だちに下校時の買い食いに誘われるという場面を設定した。自分と友だちの気持ちを大切にしながらアサーティブに断る演習を行った。「葛藤す

る場面」を先生方が体験することで、様々な対応の仕方を理解したようだ。更に代表グループのロールプレイを見ることで学び合う体験をすることができた。

アンガーマネジメント演習「10秒呼吸法*9」

細かい秒数や姿勢にこだわることなく、自然な気持ちで行ってほしいと説明した。それぞれのペースで呼吸法を行い「すっきりした」「気分がよくなった」等、呼吸法の成果を実感することができた。

またすぐに怒ってしまう児童がいる学級の担任は「ぜひ実践したい」と話していた。

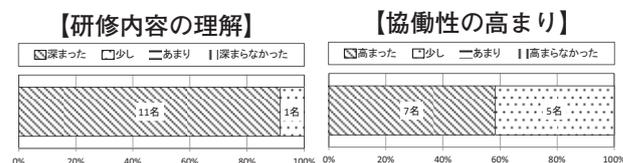
*9 10秒呼吸法とは、兵庫教育大学藤原忠雄准教授が提唱するリラクセーションを目的とした呼吸法である。

◇ まとめ

振り返りの時間に感想を交流した。参加者からは「アンガーマネジメントについて更に学びたい」といった感想も出された。

最後に進行者から、学級の実態に合わせて今日学んだことを実践してほしいと伝えた。

⑤ 実践の考察と改善点



〈考察〉

事後のアンケート結果より、研修内容を十分に理解することができたことが分かる。「こういう場面ではどうすればよいか」といった質問が出されるなど、意欲的に取り組む様子が見られた研修であった。

また、演習の後に自然と拍手が起こるなど、職員間の協働性を高める効果があることを感じる事ができる校内研修であった。「職員の協働性を高める意味でも、コミュニケーションを中心とした今日のトレーニング研修は大変意味がありました。職員間で向き合う機会も重要だと感じました」という感想からも研修の効果を読み取ることができた。

〈改善点〉

- ・ 演習の際、アサーティブな対応の仕方で迷う場面が見られた。対応例集があると正しいコミュニケーションスキルを獲得しやすと思われる。

(5) 実践5 校内研修実施依頼校C小学校校内研修

～身に付けたい力 A4 B1

① 活動名

「K-1 3法*10による事例研究」

*10 K-1 3法とは、早稲田大学河村茂雄教授が考案した事例研究法。Q-Uの結果をもとに13のステップで解決志向の具体的な対策を考えていく事例研究法である。

② ねらい

○ 自校の現在の事例について、K-1 3法を用いた解決志向の事例研究を行い、教員全体の協働性を発揮しながら具体的な指導援助策を考えることができる。

○ 校内研修実施案をもとに生徒指導主事を中心に校内研修を進めることができる。

③ 指導のポイント

- ・ 講義ではQ-Uについての概略を教育センター指導主事が簡潔に説明する。
- ・ 事例研究では教育センター指導主事がリードするのではなく、C小学校の生徒指導主事が中心となって進めるようにする。

④ 実践の概要

◇ はじめに

教育センター指導主事より、生徒指導主事を中心に建設的な話し合いを進めて、具体的な指導援助策を出し合ってもらいたいことを話す。

◇ 説明・演習

教育センター指導主事がQ-Uの概略を簡潔に説明し、その後、生徒指導主事を中心にK-1 3法事例研究を進めた。

K-1 3法による事例研究

〈事例発表の段階〉

生徒指導主事より、解決志向の具体的な指導援助策を考えていくことができるよう、職員間で忌憚らない意見を出し合ってもらいたいとの確認がなされた。その後、事例提供者が事例の説明をした。

〈アセスメントの段階〉

生徒指導主事より、事例提供者を責めるような発言をしないように留意することが確認された。

先生方からは身体的特徴や家庭環境についての質問が出され、事例提供者は分かりやすく答えていた。

〈対応策検討の段階〉

「個人での検討」に始まり「グループでの検討」「全体での検討」と各自が考えた対策が全体に広まり、類型化されていくように話し合いが進められた。同僚の考えを聞く中で、自分の見方や考え方を修正し



全体での検討の様子

たり、拡大したりすることができた。解決志向の具体的な指導援助策が多く出されたが、時間が足りなくなり、グループでの検討時間が短くなってしまった。

〈結論と決意の表明の段階〉

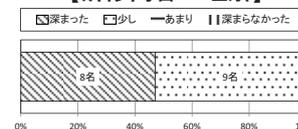
事例提供者から具体的に取り組みたいことが発表され、拍手を持って事例研究会を終了した。

◇ まとめ

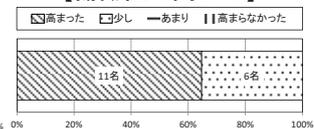
教育センター指導主事から、今回の研修会が生徒指導主事を中心に建設的に進められたことについて称賛の感想が述べられた。研修をもとに更に児童理解を深め、組織で対応してほしいことにも触れた。

⑤ 実践の考察と改善点

【研修内容の理解】



【協働性の高まり】



〈考察〉

事後のアンケートから、研修内容の理解についてはK-1 3法を十分には理解することができなかった様子が見える。初めてK-1 3法による事例研究を行ったためと思われる。

「様々な意見や考え、改善策が出され、頼もしくさえ思えた」「全体が問題意識を持ち、より協働性や組織的な連携が生まれると感じた」等の感想から教員の協働性については十分高まったことを読み取ることができた。

〈改善点〉

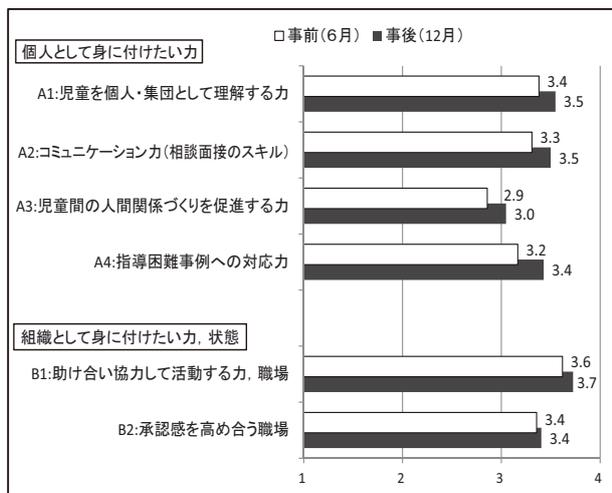
- ・ 演習では時間を気にして進行をせざるを得なかった。これは校内研修実施案の時間設定に余裕がなかったことも原因と考えられる。資料の事前配付により説明を短くするなど、時間配分の工夫改善をしていきたい。

IV 研究のまとめ

1 校内研修実施案の有効性についての考察

2回の校内研修実施後、研究協力校の教員を対象にアンケート調査を行った。

調査は、教員の教育相談的手法に関する理解の深まりとそれに伴う行動化から「児童生徒を支援する力」の変容をとらえるものとした。具体的には、A1～B2のそれぞれの力について理解と行動に関する2～3の質問を設定し、「当てはまる」から「当てはまらない」までの4件法で尋ねた。



「児童生徒を支援する力」の事前・事後比較

個人として身に付けたい力は、A1からA4の4項目平均では0.2ポイントの上昇であった。「各校内研修で向上をねらった力」と「今回校内研修で扱わなかった力」を事前から事後への伸びで比較すると、向上をねらった力の方が0.1ポイント伸びが大きかった。

また、「保護者との相談面接の考え方・やり方が役に立ったり、考え方・やり方を実際に生かしたりしたこと」を自由記述形式で尋ねたところ、23名中17名の記入があり、「まず、ねぎらいの言葉をかけ、言いたいことを話してもらうように心がけている」「保護者の意見や考えを理解しようと心がけた。対立するのではなく共に子どものよりよい成長のために考えていこうとする気持ちを伝えている」などと記述していた。また、「事例研究の考え方・やり方が役に立ったり、考え方・やり方を実際に生かしたりしたこと」では、23名中18名に記入があり、「先入観にとらわれず、児童をいろいろな面から理解し

ようとしている」「休み時間や学年会等で相談したり、アドバイスを求めたりした」などの記述があり、校内研修の後、多くの教員が理解したことを実際の指導に生かしている様子が見えられた。管理職からも、「実際に役立つ研修内容であり、研修で得たことをすぐに実践している様子が見られた」との声もあり、高めようとした力の伸び方と感想の記述から、実施案による校内研修は知識の理解にとどまらず、日常の指導に結び付いており、実施案の有効性を確認できた。

一方、組織として身に付けたい力は、B1とB2の2項目平均で0.1ポイントの上昇であった。「助け合い協力し合う力、職場」においては、校内研修前も3.6と大変高い数値であったが、さらに0.1ポイントの上昇が見られた。これは、校内研修が年代を超えて意見を交換する場として機能した表れであると推測される。ただし、「承認感を高め合う職場」については大きな変容が見られず課題が残った。

2 教育相談的な手法と体験型の研修に関する考察

「校内研修は、日常の指導やかかわりに役立っているか」と「校内研修は、教員同士のコミュニケーションを促進しているか」について「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で尋ねたところ、両項目とも全教員の平均が3.4ポイントであった(図5)。

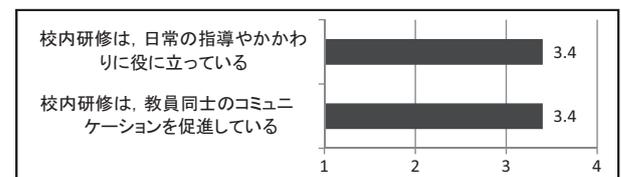


図5 校内研修の効果についての意識

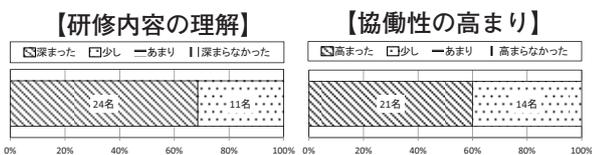
感想には「演習を通して様々なことに気付くことができた。実感を伴って内容をとらえることができ有意義だった」「演習は先生方の意見や考えを聞き、互いに学び合うことができるよい機会だった」「ロールプレイを通していろいろと考えさせられることが多かった」「ロールプレイを行い、どう対応して行けばよいのか具体的に分かった。実践に結び付けることができた」などの記述があり、演習やロールプレイを行うことで気付きを得たり実感を伴って受け

とめたりしていることや、同僚の話を書くことで学びを深めていたことが分かった。また、その中で自分の考えや行動を修正・拡大して実践に結び付けており、教育相談的な手法を生かした体験型の研修は参加した教員一人一人が能動的に学び、自分なりの答えを見付ける実践的な集団学習の場となったことが確かめられた。

一方、前述したように助け合い協力し合う姿勢の高まりが見られる中で、承認感を高め合う姿勢には向上があまり見られなかった。研修中の観察では同僚のよさやがんばりを認める姿が見られたので、日常においてもそれが行動に移せるようにしていきたい。具体的には、全体で学んだことを確認し合い、今後それらをどう生かすかを考えるなど、体験型研修のよさを日常の実践により生かせるよう、振り返りの方法・内容について改善を図りたい。

3 校内研修の実施依頼校の実践からの考察

校内研修の実施依頼校3校のアンケート結果をまとめると次のような結果となった。



教育相談的な手法を生かした理論と技法に関する研修内容の理解では、全教員の約7割が「深まった」と答えており、「実際に演習をして身に付いた」などの感想がほとんどであった。

一方、同僚性・協働性については6割の教員が高まったと答えている。「教員の協働性を高める上でも研修は意味があった」との感想もあり、理解を進める中で協働性が高められたことが分かった。

また、実施校の教員が進行する形式の校内研修を実施することもできたので、今後はさらに、実施校の研修主任や生徒指導主事などが中心となって校内研修を進めていくことができる方法を検討し実践していきたい。

4 成果と課題

(1) 成果

① 児童生徒を支援する力を高めるために必要な教員の力を「教員のメンタルヘルスに関するアンケ

ート調査結果」を生かして選定できた。

② 選定した力を高めていけるような校内研修実施案を考案し、研究協力校及び校内研修の実施依頼校において校内研修を実施して修正等を施し、『校内研修実践資料小学校版（試案）』の作成を進めることができた。

③ 校内研修後の参加教員へのアンケートから、校内研修に満足感を持ち、協働性の高まりが見られるなど、実施案の有効性を確認することができた。また、教育相談的な手法を生かした体験型の校内研修の有効性を確認することができた。

(2) 課題

① 研究協力校や校内研修依頼校での実践から校内研修実施案の検証と修正を行ったが、限られた実践であったため、本年度取り扱わなかった身に付きたい力の実施案の作成・実践及び検証・改善については次年度取り組んでいきたい。

② 研修を受ける側の検証を進めることができたので、これまでの研究成果をもとにして、研修を進める側（生徒指導主事や研修主任など）に立っての検証も進めていきたい。

③ 研究協力校での実践を重ねる中で、児童生徒を支援する力の向上を教員の理解や行動の変容を通して継続してとらえていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 研修内容の改善・充実のための調査研究－研修者のメンタルヘルスの現状把握と分析を通して－
(福島県教育センター研究紀要 2010)
- 2) 生徒指導提要 (文部科学省 2010)
- 3) 教育カウンセラー標準テキスト初級・中級編
(図書文化 2004)
- 4) 教師が使えるカウンセリング
諸富祥彦編 (ぎょうせい 2010)
- 5) 授業研究会の活性化と同僚性に関する研究
(兵庫県立教育研究所研究紀要 千家弘行 2010)